

ゴキブリだって愛されたい

The Earwig's Tail : a modern bestiary of multi-legged legend



タイトル 「ゴキブリだって愛されたい」-昆虫たちの都市伝説
原 題 The Earwig's Tail , a modern bestiary of multi-legged legend
著 者 メイ・R・ベレンbaum (May・R・Berenbaum)
訳 者 久保儀明
出 版 社 青土社
発 売 日 2009 年7月
ページ数 272p

著者はイリノイ大学昆虫学部教授および学部長で、文化昆虫学の観点から、現代人の昆虫イメージの成り立ちを幅広く研究しています。原題の「The Earwig's Tail」は「はさみ虫の尻尾」ですが、「ゴキブリだって愛されたい」というのは訳者がつけた題のようです。

本書はクモを除けば他は六本足の昆虫たちで、かつての動物寓話集とは異なり、昆虫と節足動物たちの最も広く知られていると思われる伝説的な 26 種の昆虫に関する物語を収録している「昆虫たちの都市伝説」です。序には、「21 世紀の昆虫寓話」とあります。

都市伝説って何だろうと身構えてしまいますが、Urban Legend の直訳で、「口裂け女」、「ベッドの下の男」など、その内容の特徴は、話し始めが「友人から聞いた話なんだけど・・・」で始まる噂話の形をとることで、「友達の友達」という形をとる存在しない第三者の経験談とすることで妙なりアリティーを醸し出すような所が都市伝説といわれる所以です。

目次を覗いてみると、

1. 空気力学的には不完全なマルハナバチ
2. 世にも退屈なおしゃべり虫
3. カリフォルニアおしゃべりゴキブリ
4. ケジラミの改良品種
14. 原子力ゴキブリ
15. [オリンピック・ノミ](#)
16. 預言者イモムシ
17. 女王蜂

- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 5. コロニー崩壊騒乱ミツバチ | 18. 右利きのアリ |
| 6. フィルター付きマルチ映像レンズバエ | 19. 性欲を増強するゲンセイ |
| 7. 遺伝子組み換え虫 | 20. トイレット・グモ |
| 8. 無頭ゴキブリ | 21. 欲望を抑えられない蚊 |
| 9. イラク・ラクダグモ | 22. 猛毒メクラグモ |
| 10. 顔狩り虫 | 23. 羽ばたきによってカオスを引き起こす
チョウ |
| 11. キッシング虫 | 24. X線が誘発した巨大昆虫 |
| 12. バッタ | 25. ヨーグルト甲虫 |
| 13. オスを食い殺すカマキリ | 26. マイクロ波駆除装置ムシ |

のように、クモも含めた昆虫 26 種です。虫の大嫌いな人たちはこの目次を見ただけで二の足を踏むかも知れませんね。

本書の主な目的は、昆虫の生物学の奇妙で素晴らしいありのままの姿に照明を当てることによって、昆虫とその近縁生物(クモなど)に関する「真実」と「虚説」を見極めようとする読者の健康的な懐疑心を刺激することにあると著者は述べています。

中世の「動物寓話集」は豪華で多彩な挿絵で広く知られていますが、本書でも、才気縦横で構想力の豊かな挿絵画家のジェイ・ホスラーによって中世動物寓話のスタイルを 21 世紀の感性と巧みなユーモアによって再現して私たち読者を楽しませてくれます。

さて中身を二、三覗いてみましょう。

「マルハナバチは物理学の法則に基づく限り飛べない」という話。この話は私もずいぶん昔に読んだ覚えがありますが、どの本だったか忘れてしまいました。当時この話を聞いた時「それは計算の仮説が間違っているからだろう」と一顧だにしませんでしたが、ただ「誰が言ったんだろうということだけは確かめておきたいな」と思いながらそのことも忘れていました。本書でそれが判りました。「昆虫たちの飛翔」という本を書いたフランスの昆虫学者のオーギュスト・マニャンだったそうです。人騒がせな学者ですが、現実に飛んでいる訳ですから、計算の仮説が間違っているということは判っていたはずです。それとも他に何か目的があったのでしょうか。

「コロニー崩壊騒乱ミツバチ」の話は、書評「ハチはなぜ大量死したのか」でも詳しく紹介しましたが、ドイツを代表する日刊紙の「南ドイツ新聞」に、「ミツバチが姿を消してしまうとどの様な事態が引き起こされるか」に言及した文章に、アインシュタインの述べた言葉が載っているという不思議な個所があります。また、著者が、ヘンリー・フ

オンダは「養蜂家」だったとか、ジョニー・デップは昆虫収集家だなど「皆さん知ってますか」と問いかけるところもあります。「ミツバチがいなくなったらどうしよう」と本気で心配している人達にも、「大丈夫ですよ」というサービスも忘れていません。

「オリンピック・ノミ」の話では、ちょっとした計算が出てきます。すなわち、体長 3mm のノミは、体長のほぼ 110 倍の距離を飛ぶことが出来る。170cm の身長の人であれば、その 110 倍の 187m も飛べるといいますが、これでは無事で済むはずがありません。皆さんもお判りのように、この計算の問題点は、表面積に対して体積が占めている比率が考慮されていないところです。



動物たちの能力を比較する場合、たとえば「ノミが人間大の大きさだったら」というように、比較するものを同じ土俵で考えてみることです。なお、以下の計算では使いませんが、昆虫や動物(人間を含む)が出す力はほぼ同じで、おおよそ $5\text{kg}/\text{cm}^2$ といわれています。

具体的に計算をやってみましょう。たとえば、身長 170cm の人間と身長 1.7mm のノミの話をしてみましょう。本書では、ノミの体長の最良の推定値は $1/16$ インチから $1/8$ インチ、すなわち、1.5mm から 3mm だそうなので、判りやすいように、ノミの身長もこの範囲内の数値(1.7mm)を用います。

そうすると、ノミは人間の $1/1000$ の大きさになりますから、筋肉の断面積、は $(1/1000)^2$ 、すなわち発生する力は人の 100 万分の 1 になります。一方、体重は $(1/1000)^3$ 、すなわち人の 10 億分の 1 になります。出せる力に対して体重がもっと軽くなります。これが、ノミの筋肉が示す見かけ上の力になります。だから、ノミは体長の 110 倍もの距離を飛べるわけです。参考までに記しておくと、ノミが最高到達点に達するまでの時間は $1/2000$ 秒、かかる G(重力加速度)は 140G だそうですよ。

逆に、ノミが人間大になれば、発生出来る力は 100 万倍になりますが、体重は 10 億倍にもなり、出せる力の割には体が重く、人間大になるとノミは力不足になり、高く飛べなくなるというわけです。

「性欲を増強するゲンセイ」では、猛毒のカンタリジンを持つマメハンミョウの話が出てきます。ゲンセイとは「茺青」と書き、ヨーロッパ産のカンタリスのことだそうです。日本ではマメハンミョウ(豆斑猫)のことをいいます。カンタリジンが出てきたので、ここ敦賀市でも見かけるオオツチハンミョウの話かと思いましたが、これも同じ猛毒を持つ昆虫です。

インターネットで「茺青」を調べると、医薬情報の中にその毒性のことが記述されており、「成分」、「毒性」、「症状」、「処置」、「事例」、「文献」等が詳しく記載されています。勿論「茺青」を調べていると、きわどいサイトに行き着く場合があり、著者は『何時の日か聞き取り調査官から事務所のコンピュータで「セクシーな美人とのお付き合いを斡旋する」サイトにアクセスしたのは何故か」と尋問された時、事情を説明しても、調査官は信じてくれないだろう』と心配し、れっきとした昆虫学(Entomology)のサイトにアクセスしているのにとユーモアを交えて不満を述べています。

「顔狩り虫」とは何だろうと読み進めるうちにそれが「メンガタスズメ」(ドクロ蛾あるいは骸骨蛾とも呼ばれている)だったり、「預言者イモムシ」とは何だろうと読み進めるうちにそれが「クマケムシ」だったり、目次はストレートな内容ではなく、「これは何だろう」と思わせるような捻ったタイトルになっています。読み進めるうちに「ああ、あの虫か」と気付いて苦笑するというわけです。

「動物寓話集」は何冊か読んだことがあります、が、「昆虫寓話集」は初めてです。本書に出て来る虫たちも「ハチ」、「ゴキブリ」、「クモ」、「ガ」、「チョウ」、「バッタ」、「カマキリ」、「カ」など皆さんおなじみのものばかりです。

目次からも判るように、本書は26の物語によって構成されています。虫の嫌いな人は、本書を読むことによって、今まで抱いていた虫に対する苦手意識が覆されて、虫たちを違った側面から眺めることが出来るようになるかも知れません。というのも、著者は知的に、しかもユーモアを交えながら、虫たちの専門的な解説、昆虫伝説に対する反論やその問題点の指摘などを自分でも楽しみながら私たちに語りかけてくれるからです。

虫の好きな人たちは勿論、虫の嫌いな人たちにもお薦めの一冊です。